

ジャック・ラカンの精神分析的実践

— フロイトへの回帰の意味 —

中 野 明 徳

【要 旨】

ラカンは「フロイトへの回帰」を唱道して、フロイトの精神分析学説を哲学的に見直した。彼はパラノイアや鏡像段階の研究から自我心理学に反対して、自我から主体を分離した。主体の欲望に注目し、他者との関係で、人間の欲望は他者の欲望であると弁証法的に理解した。彼は言語論それに象徴界・想像界・現実界という局所論を導入して構造主義的に考察し、無意識は言語のように構造化されて象徴界の次元にあるとした。

【キーワード】

フロイトへの回帰 鏡像段階 弁証法 自我と主体 象徴と想像

I. はじめに—フランスにおける精神分析の展開

フランスにおけるフロイトの精神分析は、ルディネスコ (Roudinesco, 1993) によれば、医学の場では3つの領域を通じて紹介された。第1に、ピエール・ジャネ (1859-1947) の心理分析を通じてである (中野, 2023)。第2に、オイゲン・ブロイラー (1857-1939) を中心とするチューリッヒ学派による力動的精神医学、特にカール・グスタフ・ユング (1875-1961) の分析心理学の流れがある (中野, 2022)。第3にアンリ・ベルクソン (1859-1941) の哲学という流れがある。以下、フランスにおける精神分析の展開をみていくが、下線は筆者による。

1926年に**パリ精神分析協会** (SPP) が設立された。協会の設立メンバーは、ルネ・ラフォルグ、ギリシャ大公妃マリ・ボナパルト (1882-1962)、ルドルフ・レーヴェンシュタイン、エドゥアール・ピション、アンリ・コデら10人、それに2人のジュネーブの精神分析家シャルル・オディエ、レイモン・ド・ソシュール (父がフェルディナン) が加わった。彼らがフランスにおける第1世代である。1939年9月にフロイトが亡くなり、大半は亡命した。オディエはスイスに戻り、レイモン・ド・ソシュールとルネ・スピッツはニューヨークに移り、レーヴェンシュタインも1942年にアメリカに移住した。第二次世界大戦の間、第2世代として、ジャック・ラカン、サッシャ・ナシュト、ダニエル・ラガーシュ、フランソワーズ・ドルトが登場する。

1953年6月、**国際精神分析協会** (IPA) の基準に合致した教育研修を実施するための新しい精神分析研究所の創設をめぐり、ダニエル・ラガーシュ、ジュリエット・ファヴェ＝ブートニエ、フランソワーズ・ドルト、ブランシュ・ルヴェルション＝ジューヴが、1年間の紛争後にパリ精神分析協会を脱会した。ラカンは革命家だったので、ナシュトとマリ・ボナパルトらの保守派か

ら非難されて、精神分析フランス協会（SFP）の基礎を築いたばかりのラガーシュたちと合流した。この紛争でラカンは、治療の実務に対して異議を唱えられた。ラカンは50年代以降のIPAで効力を持った技術的原則に従っていなかった。IPAの治療原則は、少なくとも50分の治療時間を週に4～5回とり、少なくとも4年間は続けなければならなかった。治療方法については、学説の不一致が黙認されたが、期間の原則違反は除名処置で処罰される可能性があった。ラカンは好きなように治療期間を打ち切る可変的な技術を活用し、ラカンはパリ精神分析協会正会員の全員から有害だと判断された。ラカンは1953年7月、SFPの弟子たちの3分の1に相当する15人に、15分の治療を週4回というペースで教育分析をしていた。これはSFPがIPAへ加盟するのを妨害した。1936年以来、ラカンとフランソワーズ・ドルト（1908-1988）の2人はしだいに支配的地位を占め、フランス精神分析の第3世代が出現するようになった。

1953年夏のロンドン会議で、ハインツ・ハルトマンを議長とする中央執行部は、SPPの脱会者の加盟を拒絶した。彼は新しい協会の応募の審査を委員会に一任し、ウィニコットが調査委員会を4人で構成して運営した。ウィニコットは、ドルトの精神分析の仕事を肯定的に評価したが、教育分析家としての資格は好ましくないという意見を述べた。調査委員会はドルトとラカンの実務について、同じように否定的な判断を下した。ラカンは何よりも短時間セッションが非難された。2人はクライニ的かアンナ・フロイト的な専門家ではなく、どんな「規準」にも従っていなかったし、週に4～5回という義務的な治療規則に従っていなかった。1959年7月にコペンハーゲン会議で、フランスの応募を検討することになり、1961年5月調査委員会はSFPの会員を「シニア」（第2世代）と「ジュニア」（第3世代）に分けて尋問した。調査は1963年12月まで行われ、ラカンのフロイト学説と、英米系の考え方の交渉は破綻した。

1962年9月にマリ・ボナバルトが亡くなった。1964年6月以降、IPAに統合されたのは、昔のSPPと、解散したSFPの約30人の古い会員からなる新しいフランス精神分析協会（APF）である。APFにはラガーシュ、ラカンの弟子だったラブランシュ、ポンタリスなどがいる。ラカンとドルトはIPAから除名され、彼らときたるべき第4世代の4分の3は、「ラカン派」と呼ばれるようになった。ラカンは1964年6月から新しい学派、パリ・フロイト学派（EFP）を創設する戦略を立てた。ラカンはフロイトの本物の思想を復元できるただ1人の人間として、100人に達する旧SFPの会員を引き連れ、そこに約30人の新会員が加わった。EFPの会員はどのような技法上の規則も強要されず、会員数は解散直前の1979年には609名に達した。1985年にSPPとAPFは合併し、会員数は46名であった。

1969年にセルジュ・ルクレールがパリ・ヴァンセンヌ第8大学実験センターに移り精神分析部門の基礎を築こうとしたが、1974年にラカンは娘婿であるジャック＝アラン・ミレールとともにこれに反対し、自分たちの支配下に置いた。ラカンは、1967年に教育分析家の資格を手に入れる方式として、彼が命名した「パス」を通過する必要があるとしたが、一部が離反し、1969年にフランス語精神分析組織（OPLF）というグループが創設された。ラカンは1980年にEFPを解散し、1981年に亡くなった。ラカンの死とともにラカン派は分裂し、フロイトの大義（ECF, 1980）、ラカンの正統王朝主義（ミレールのセクト）などの分派が生まれた。

このように第二次世界大戦後、フランスの精神分析界で分裂がすさまじい。その発端にラカンの影響がある。ラカンは「フロイトへの回帰」を唱道して、ゼミナールを通して多数の者を教育してきた。本稿はこうしたラカンの精神分析的実践の意味を考察するものである。

II. ジャック・ラカンの生涯

ジャック・ラカンの生涯について、『ジャック・ラカン伝』(Roudinesco, 1993)に沿って素描する。ジャック＝マリ・エミール・ラカン(Jacques-Marie-Emile Lacan, 1901-1981)はフランスのパリで生まれた。父はシャルル・マリ・アルフレッド・ラカン(マリはマリアを意味する)で1873年生まれ、母はエミリー・フィリピヌ・マリ・ボードリーで、2人は1900年に結婚した。ジャックは第1子で、第2子レイモン(1902年生まれ)は2歳でなくなり、第3子は妹マドレーヌ・マリ・エマヌエル(1903年生まれ)、第4子は弟マルク＝マリ(1908年生まれ)である。弟は1929年に修道院に入り、1931年マルク＝フランソワに改名した。ジャックの祖父エミール・ラカンは、毛織物と食料品の商取引をしていたが、パリの南オルレアンで食酢醸造をしていたデソー家に雇われ、経営者の姉であるマリ・ジュリー・デソーと結婚して、名家の一員になりパリの豪華なマンションに住んだ。両親と祖父母は折り合いが悪く、祖父はオルレアンに住むことになり、父は事業を継いだ。ジャックは祖父のエミールという名前がつけられ、宗教的感情に息苦しい思いをし、祖父を軽蔑して口論した。

ジャックはスタニスラス中学で学び、成績はトップクラスであったが、尊大で子どもの遊びをまったく好まなかった。1915年の戦争は彼に医学という職業を選ばさせた。1923年ごろ、彼はフロイト理論を耳にし、ニーチェを読み始めた。パリ精神分析協会が設立された1926年、ラカンは神経学会で初めての症例報告をした。ラカンは神経学から精神医学に転身してサン・タンヌ病院、パリ警視庁特殊医務院、チューリッヒのブルクヘルツリ病院などで研究し、司法医の資格を得た。サン・タンヌ病院のインターンにアンリ・エー(1900-77)やアンリ・エレンベルガー(1905-93)がいた。エレンベルガーはラカンについて、「彼の冗談は辛辣で耐え難いものだった。あの人は一種の特権階級の尊大さを身に着けていた。患者との関係でも急所をつく意地の悪いことを口にするしたたかな技術を持っていた。個人的には魅力ある人だった」と語る。

ラカンに精神医学の師が3人いる。ソルボンヌ大学のジョルジュ・デュマ教授、1927年から28年にかけてサン・タンヌ病院のアンリ・クロード教授、1928年から29年にかけて警視庁精神科特殊医務院医長ガエタン・ド・クレランボー(1934年に自殺)である。クロード教授によって、精神分析が導入され、クレランボーは意識と無意識の不連続をみていた。ラカンは1931年「パラノイア性精神病の構造」が発表するが、このときクレランボーは、ラカンの学説を剽窃したとして非難している。ラカンは1931年に「同時性精神異常」の症例や女性のパラノイアの症例を発表し、1932年に学位論文「人格との関係からみたパラノイア精神病」を発表した。

ラカンは1932年からルドルフ・レーヴェンシュタインから教育分析を受け始めた。レーヴェンシュタインはポーランドで生まれ(1889年)、1925年にマリ・ボナバルトの援助でパリで開業した。ラカンは氣質的に自由人であり、自分の欲望に対しては独断的な疑いをまったく受け入れず、精神分析の最小の規則にさえ従わなかった。レーヴェンシュタインからみるとラカンは分析不可能であった。ラカンは学位論文の冒頭でT・B氏に献辞を述べるが、この人は15歳年上の未亡人マリ＝テレーズ・ベルジェロという愛人であり、学位論文をタイプで打った。さらに彼は友人の妹マリ＝ルイーズ・ブロンダン(愛称マリー)に対して新しい愛に目覚めて1933年に結婚した。1938年、フロイト一家はマリ・ボナバルトらの協力でロンドンに亡命したが、ラカンはピションの援助を得てパリ精神分析協会の正会員に任命された。

1932年から36年まで、ラカンの重要なテキストを1冊も書いていない「空白」の期間である。ラカンは医学の研究にいらだち、ソルボンヌ大学の論理学と哲学の資格取得証書がほしかった。

大学で哲学の教育をまったく受けなかったラカンは、1933年から、時代のすぐれた思想家たちと個人的関係を持った。3つのH（ヘーゲル、フッサール、ハイデッガー）を学ぶことができたのは、アレキサンドル・コイレ（1892-1964）、アレキサンドル・コジェーヴ（1902-1968）、ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）などとの交流のおかげである。コイレはロシアで生まれ、17歳でフッサールの生徒となり、パリでベルクソンの講座に参加し、フランスに移住した科学史家である。コイレはヘーゲル哲学を新しく展開し、彼の講義にコジェーヴやバタイユが参加した。コジェーヴはモスクワに生まれ、コイレの友人になってヘーゲルの再発見に着手し、1933年から『精神現象学』の再読と、6年間続くゼミナールの準備に取りかかった。ラカンは1934～37年まで、このゼミナールの熱心な聴講生であった。これはラカンにとって、口頭という様式を知の伝達として使うモデルになった。コジェーヴとラカンは『ヘーゲルとフロイト-解釈の比較対照の試み』という研究書を一緒に書こうとした。それはコジェーヴがコイレ宛のメモの中に残っており、ラカンが国際精神分析協会の会議で「鏡像段階説」を発表する前の1936年7月の日付であった。コジェーヴは、デカルトのコギト（われ思う）とヘーゲルの自意識を比較し、ヘーゲルの哲学が哲学するという欲求そのものであり、「デカルトのわれ思うは、ヘーゲルではわれ望む」になることを示した。コジェーヴの「自意識の形成過程」の原稿の中に、「欲望の主体としてのわたし、存在の真実の啓示としての欲望、幻想の場と過誤の発生源として自我」という3つの概念が明らかにされている。これらはラカンが1938年以後に使う主要な概念になり、ラカンはフロイトの著作の哲学的解説に移っていく。

1936年8月のマリエンバート（チェコ）の国際精神分析会議で、ラカンはアンリ・ワロンの研究に由来する「鏡像段階」について発表した。持ち時間から大幅にすぎたために議長のジョーンズから中断され、その内容は学会の会報に載っていない。当時の精神分析学会はアンナ・フロイトとメラニー・クラインとの間で激しい論争が繰り広げられていた（中野，2021）。それまでのフランスの精神分析はアンナ・フロイトとその発展の自我心理学であった。他方、クラインは欲動の二元論（生の欲動と死の欲動）と、第二局所論（自我、エス、超自我）を導入して1920年代のフロイトの手直しをした。欲動の対象はイマージ（主体の無意識に固着し、主体の行動や他者理解を方向づける表象）に影響された対象イメージであって、自我はこれを段階的に取り入れて、構造化されるというものであり、ラカンはクラインを選択した。鏡像という試練は6ヵ月と18ヵ月の間に介在する通過儀礼となるもので、子どもはこの時自分を認識し、空間の中で自我を一体化することができる。この頃、『フランス百科事典』の執筆をワロンからラカンに依頼された項目は「家族」であった。1936年に編集部に渡った原稿は、難解極まるものであった。

ラカンの「家族複合」を執筆しているころ、妻マリーは妊娠しており、35歳で父性の試練に直面した。1937年マリーは女の子カロリーヌを出産し、1938年にマリーがティボーを妊娠したころ、ラカンとジョルジュ・バタイユの妻シルヴィア（1908年生まれ）との関係が始まった。シルヴィアは女優であり、1939年から特権的な伴侶になった。1939年8月にマリーは男子ティボーを出産した。マリーがシルヴィアのことを知ったのは1940年の秋で、11月に女子シビルを出産した。1941年7月にシルヴィアが女兒ジュディット・ソフィを出産したが、姓はバタイユであった。マリーから要求された離婚は1941年12月に成立した。カロリーヌはラカンの仕事を理解しようとしなかった。ティボーとシビルは父親の二重生活に苦しみ、母親のうつ病性の苦しみをみてきた。シルヴィアがバタイユと離婚したのが1946年7月、ラカンと結婚したのが1953年7月であった。ラカンはそれまでジュディットに「父の名」を与えられなかった。1958年にカロリーヌが結婚し、はじめてラカンの2つの家族が正式に顔を合わせた。

ラカンは1948年5月に開かれた仏語圏精神分析家の第11回会議に出席し、クラインの主張をか

なり組み込んだ発表をした。彼が主張した第二局所論の解説は、すべての抵抗の想像上の場としての自我と、主体の現実の位置の表示である〈わたし〉とを区別することであった。1953年6月にパリ精神分析協会（SPP）が分裂し、ラカンは精神分析フランス協会（SFP）に合流した。この紛争でラカンは可変的治療時間の問題で苦境に立たされた。同年7月に「象徴界、現実界、想像界」を講演した後、9月27日の「ローマ講演」で「精神分析におけるパロール（話）とランゲージュ（言語活動）の機能と領野」を報告し、自分の歩みをフロイトの原文への回帰と位置づけた。これを可能にしたのは、フェルディナン・ド・ソシュール（1916）の『一般言語学講義』とレヴィ＝ストロース（1967）の『親族の基本構造』の重要性を発見したことにある。レヴィ＝ストロースは、エディプスの普遍主義を近親相姦の恐れ of 感情でなく、象徴機能の存在にもとづいて再考し、ラカんに構造主義の道を拓いた。ラカンは独自の無意識の原理を象徴機能と名づけ、そのまわりにそれぞれの主体に特有の状況の多様性を組織立てた。この統一理論の配置に、「象徴界・想像界・現実界」という三項からなる局所論を設定した。最初の2つは、ラカンがワロンから借用したものである。フロイトの無意識は、ランゲージュの場合のシニフィアンを媒介の場所として再考された。想像界は、受信、予測、幻覚という主体の構成に結びつく現象が位置を占める。現実界は、無意識の欲望とそれに関する幻想についての心的現実である。

ラカンは精神分析の始まりを知ろうとして、ユングの弟子ローラン・カエンに仲介を依頼して、1954年ごろカール・グスタフ・ユングを訪問する。カエンは、ラカンの考えるシニフィエとユングのいう元型とは、いところ同士だと考えていた。ラカンは自我がIchの全体ではなく、Ichは想像上の自我と叙述上のわたしに分割した。1955年にエドガー・ポーの『盗まれた手紙』という短編に準拠し、「小文字の他者」（主体の外部にありながら主体を決定づけるもの）に対する「大文字の他者」（しだいに消えてしまうことのない絶対的な他者）を理論化した。その後、象徴的父親としての父親機能を発表し、「父の名」（父性の隠喩で、第一に父の機能を純粹シニフィアンの象徴効果とし、第二に欲望を象徴的負債の領域に組み込むことにより主体のあらゆる力動を支配する）を概念化した。ソシュールは言語記号を2つの部分に分割し、ある概念の聴覚的イメージをシニフィアン、その概念自体をシニフィエと呼んだ。ラカンはフロイトの第二局所論を解釈するために、ソシュールとは反対に、シニフィエをシニフィアンの下に位置づけ、シニフィアンに重要な機能を与えた。自我と同一視できない主体については、ラカンはまず無意識の主体として定義づけた。それはフロイト（1894）のいう防衛のための Spaltung（分裂）によって分割される主体である。主体は完全なものとしては存在しないが、ランゲージュにあっての無意識の固定化が示される文字、すなわちシニフィアンによって表象される。夢はシニフィアンによるシニフィエの変化として表現され、ラカンは「無意識は言語のように構成されている」とした。

1955年から60年の間、ラカンはアメリカの精神分析を攻撃している。それはエスでなく自我を中心とした、社会に対する個人の適応理解に関連づけた学説であり、そこにはアンナ・フロイトの説と自我心理学が投入されている。ラカンは主体の真実への追求と、自我の錯覚を超えた無意識の欲望の露出の追求に中心をおいた。ラカンは理想自我（Ideal-Ich）と自我理想（Ich-Ideal）を区別し、理想自我が遺伝的に超自我に先立つもので、想像界に属するナルシズム的な形成物とし、その起源を鏡像段階に見出した。自我理想は、他者に対する主体の関係全体を組織できる象徴機能として定義された。父親は子どもに自分の名をつけるのでシニフィアンの化身となり、母親の剥奪者としてこどものそばに介在して、こどもの自我理想を発生させるとみた。

1960年代の精神分析は大衆精神分析であり、この組織はフロイトの弟子の第2集団が形成した国際的な第3世代に特有である。ところがフランスでは、独軍の占領でユダヤ人の移民が欠落し、精神分析の定着が遅れた。1963年10月に、ラカンのIPAからの除名が発効した。ラカンは

1964年にパリ・フロイト学派(EFP)を創立し、その中にモード・マノーニ、オクターヴ・マノーニ、セルジュ・ルクレールなどがいた。フランス精神分析運動の大衆化は、しだいに心理学研究に組み込まれ、フロイト派の第4世代以後、伝統的な文化からの離脱がみられるようになった。心理学の進出が意味する危険性を自覚したラカンは、ミシェル・フーコーの反心理主義に好意的態度をとり、あらためて哲学的な方向をとった。ラカンはフーコーの師であるルイ・アルチュセールの「哲学と人間科学」に注目した。アルチュセールの生徒にジャック＝アラン・ミレール(1944年生まれ)がいて、彼はラカンの「破門」についてのゼミナールに出席して魅了された。ミレールはラカンの仕事はもはやフロイトの仕事ではないとして、分類、整理していく。

1963年、ラカンはフランソワ・ヴァールという並外れた編集者に会う。ヴァールはラカンのゼミナールを聴講し、1954年から60年までラカンの分析を受け、その後スイス社に雇われた。彼はラカンに出版を提案したが、ラカンは躊躇した。ラカンのゼミナールに5年間参加したポール・リクール(1965)が『フロイトを読む』を出版し、フロイトの哲学的解釈をした。この出版はラカンを激怒させ、1966年に『エクリ』が誕生した。それ以後ラカンは精神分析の一指導者だけではなく、大きな思想家として認められた。この年、ジュディットはミレールと結婚した。ラカンのゼミナールは1953年からサン・タンヌ病院で行われてきたが、1963年にラカンはIPAから「破門」されて、場所を高等師範学校(ENS)へ移して再開された。その後、1969年から1978年までの9年間、パリ・ヴァンセンヌ第八大学でゼミナールが開かれた。

1970年以後、ラカンは転移の条件として、「マテーム(認識を意味する造語)」と「ボロメオの結び」という形式化に取り組んだ(Lacan, 1975)。1974年にはテレビで放映された(Lacan, 1974)。ラカンは治療時間を数分に短縮し、ラカンの何人かの弟子たちが10分以内の治療時間を援用したに過ぎなかった。彼は1970年から80年までに、1時間あたり平均10人の患者をとり、月に約20日間の仕事をした。ラカンは次第に衰え、EFPの会員に1980年1月15日づけの「解散通知」の文書が郵送された。EFPの法的な解散は1980年9月に多数決による投票で可決された。1981年9月9日、ラカンは結腸ガンで亡くなった。ラカンの死後、遺言執行人に指名されたミレールは『エクリ』に採用されなかった論文を発行するとともに、ヴァールに代わって『ゼミナール』を発行することになったが、そこには脚注、索引、考証、参考文献もなく、ラカンが犯した誤りもほとんど訂正されなかった。

表 ジャック・ラカンの年譜

西暦	年齢	出来事
1901	0	4月13日、フランスのパリで生まれる
1926	25	パリ精神分析協会(SPP)設立、ラカン神経学会で症例報告
1932	31	「人格との関係からみたパラノイア精神病」を発表、教育分析を受け始める
1933	32	マリ＝ルイズ・ブロンダン(マリー)と結婚(～1941年12月)
1936	35	国際精神分析協会(IPA)で「鏡像段階」を発表(マリエンバート)
1937	36	長女カロリーヌ誕生
1938	37	フロイトがロンドンに亡命、ラカンはパリ精神分析協会の正会員になる、「フランス百科事典」第8巻「精神生活」の『家族』を執筆
1939	38	長男ティボー誕生
1940	39	次女シビル誕生
1941	40	マリーと離婚、シルヴィア・バタイユが女兒ジュディットを出産

西暦	年齢	出来事
1953	52	パリ精神分析協会を脱会し、 <u>精神分析フランス協会</u> （SFP）に合流、サン・タンヌ病院でゼミナール開始、シルヴィアと結婚、ローマ講演
1954	53	カール・グスタフ・ユングを訪問
1963	62	SFPが分裂し、ラカンはIPAから除名される
1964	63	ラカンが <u>パリ・フロイト学派</u> （EFP）創立、SPPとSFPが <u>フランス精神分析協会</u> （APF）に統合される、高等師範学校でゼミナール再開、
1966	65	『エクリ』出版
1969	68	パリ・ヴァンセンヌ第八大学でゼミナール開始（～78年）
1974	73	『テレビジョン』出版
1975	74	『アンコール』出版
1980	79	EFP解散
1981	80	9月9日、ラカン亡くなる

Ⅲ. ラカンの研究業績

1. 人格との関係からみたパラノイア精神病（1932）

これはラカンの学位論文で、I章では、ドイツとフランスの伝統的な精神医学から、パラノイア性精神病を総括する。II章は症例《エメ》と自罰パラノイアを論じる重要な章であり、III章が結論である。ここで症例《エメ》の病歴について要約する（参照 Roudinesco, 1993）。エメは本名がマルグリット・パンテーヌで、1892年生まれである。1931年4月10日の夜、38歳のエメはナイフで女優Z夫人（ユゲット・デュフロ）を刺殺しようとしたが、取り押さえられた。「誇大妄想的傾向と恋愛妄想的気質を伴い解釈に基づく系統的迫害妄想」という法医学的鑑定書によって、同年6月3日にサン・タンヌ病院に収容された。ラカンが彼女に会ったのは6月18日で、彼はこの日から1年半にわたり観察し、彼女を「パラノイア性精神病」と診断した。

エメは鉄道会社に勤務し、同じ会社の従業員と結婚して息子が1人いるが、6年前からパリの職場で、一人暮らしをしていた。患者は6年半前、自発形式で6ヵ月間E保養院に入院したことがある。当時の彼女の訴えは、街ですれちがう人たちが、彼女のことを知らないのに非難する、また、町の人は彼女の行動を知っていて堕落しているというので、合衆国に逃げたいと思った。彼女は家族からの要請で未治療のまま退院した。犯行の5ヵ月前、患者は自分が原稿を提出していたG出版社から不受理の連絡を受取り、この拒否を伝えてきた女事務員を痛めつける事件を起こしていた。エメはパリに来てから、Z夫人を芝居や映画で見ている。イギリスの皇太子に自作の詩を送ることもあった。また、自分の私生活をあてこする作家のP・B（ピエール・ブノウ）と出版社を告訴しようと思っていた。エメの精神障害の始まりは28歳の時で、結婚して4年たち、妊娠していた。同僚たちが彼女の行動を中傷するというもので、それより前に彼女は夫に対して見当違いの嫉妬を口にしていた。この時、女子を出産するが死産だった。2回目の妊娠では、同様の解釈が再燃した。患者が30歳のとき、男子（ディディエ）が生まれると、子どもの世話に打ち込み、解釈癖がつのり、すべての人に敵意をいだき、すぐげんか腰になった。彼女はアメリカへ渡り、小説家になることを望んでいた。エメの人生において決定的となる1つの出来事は、彼女の結婚後の8ヵ月後に姉（エリーズ）が夫婦の家に住むようになって、エメがうまくこなせなかった役割をとるようになり、エメは夫から遠ざかることになったという事である。同時に姉はエメの子に対して母親として振舞い、エメから子を奪うことになった。

ラカンが、エメが投獄されて20日目に突然、この精神病が治癒したことに注目する。この治癒はほぼ1年半の間続いた。患者は自らの罰を実現したのである。彼女は家族全員、すべての人が自分を非難するのを確認でき、彼女自身が自分を打ちのめしたということである。ここでラカンは自罰的メカニズムをフロイト理論の超自我で理解する。精神病の生活史的発生に関しては、エメの姉との葛藤の中に中核をみた。ここからラカンはこのような患者の兄弟葛藤に注目するようになった。エメの妄想にある上流階級の人たちは、エメの自我理想（あるいは超自我）を象徴するとみる。結論として、パラノイア性体質の素因は、しばしばジャネの精神衰弱性格か、クレッチマーの敏感性格という形式をとって現れる。パラノイアの中でも、自罰パラノイアという臨床類型は治癒可能である。人格の発展の異常は超自我という用語で示すことができ、了解可能である。自罰パラノイアと復権パラノイア（好訴パラノイア）は超自我の発生段階における人格の発達停止によって引き起こされる。

なお、エメとは彼女が発表できなかつた小説から着想を得たものである。エメは息子を奪った姉とZ夫人を同一視している。エメの息子ディディエは伯母に育てられ、1949年からラカンから教育分析を受けたが、ラカンは気づかなかつた。1933年、家政婦のパバン姉妹（姉28歳、妹21歳）が雇い主の婦人とその娘の目玉をえぐって斬殺した（『二人であることの病い』に所収）。ここでもパラノイアと自罰が認められたが、姉は「別の人生では私は妹の夫になるはずだと確信している」と述べ、ラカンは「2人であることの病」として捉えなおす。

2. 鏡像段階（1936, 1938, 1949）

心理学者アンリ・ワロンが1934年に『児童における性格の起源』の中で、幼児は鏡像の中に自分の身体を外部から初めて全体性としてみることを指摘した。ワロンの関心は、幼児が自分の鏡像を実在視する段階から非実在的な表象とみなす段階にどのように移行するのか、という自己認知の発達にあった。1936年のラカンによる学会発表原稿は残っていない。

ワロンから依頼された『家族複合』（1938）の中に、ラカンによる鏡像段階の記載がある。複合（コンプレックス）は、情動から対象に適應した行為までのすべての有機的機能にかかわる反応を固定した形で結びつけ、環境のある種の現実を二重に再現している。フロイトが定義した複合は、本質的には無意識であり、失錯行為、夢、症状などの原因として明らかにされる。これらの作用は明瞭かつ偶発的な特徴を持つことから、ラカンはイマーゴと呼ばれる無意識の表象を認める。家族複合として、発達順に、①離乳複合、②侵入複合、③エディプス複合が提示され、鏡像段階は②の中で記述される。①は養育関係を幼児が必要とする寄生的様式のもとに固定し、母親イマーゴの最初の形態をなしている。②は幼児が兄弟と知り合うときに起きる。6ヵ月から2歳までの幼児の嫉妬は、根底では生活上の競争関係ではなく、精神的同一化を表している。この段階から競争者、つまり対象としての〈他者〉の認識が形をなしてくる。鏡像段階は離乳期の終わりごろにあたるが、主体が自分の像を見分けることは二重に意味がある現象である。この段階に固有の世界は自己愛的世界であり、この世界を生じさせた鏡映的反映の中心にあるのは分身のイマーゴであり、他者を含んでいない。この段階を特徴づける一時的な侵入が加わり、嫉妬のドラマの中で自我は他者と同時に構成される。嫉妬は対象を形成するから、社会的感情の原型であり、パラノイアと兄弟複合との結合は妄想的な主題に現れるとみる。

『エクリ』の中に、ラカンが1949年に第16回国際精神分析学会（チューリッヒ）で発表した「〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階」が所収されているが、上記の『家族複合』と比べてはるかに難解な弁証法の哲学になっている。生後6ヵ月から18ヵ月ぐらいの幼児は、鏡の前で自分のものとして引き受ける像の動きと、鏡に映るその周囲との関係を体験する。鏡像段階と

いうのは同一化の1つとして理解できる。自分の鏡像を引き受けるということは、後に〈わたし〉は他者との同一化の弁証法の中で自分を客観化したり、言語活動が〈わたし〉にその主体的機能を普遍性の中で取り戻させたりする。鏡像段階の空間的な騙取^{へんしゅ}の中に、人間の自然的現実が有機体として不十分であることを認めさせる意味がある。それゆえに鏡像段階の機能は、生体とその現実との関係、内界と外界との関係を打ち立てるイマーゴの機能のある特殊な場合として明らかになる。けれども鏡像的な自我は、主体が飽くことなく繰り返す自らの統一性の追求というドラマを生み出す。鏡像段階の完成する時点は、イマーゴへの類似のものの同一視および原始的嫉妬を介して、その時から〈わたし〉を社会的に加工された状況へ結びつける弁証法の端緒となるという。

3. 精神分析における話と言語活動の機能と領野 (1953, 1956, 1966)

1953年にラカンは「短時間セッション」が問題にされて、パリ精神分析協会から精神分析フランス協会に移り、サン・タンヌ病院でゼミナールを始めた。本書のもとになる講演をローマで行い、1956年にそれを論文化し、1966年に『エクリ』に収録した。ここで「フロイトへの回帰」を鮮明にし、自らをフロイディアンとした。この立場はM. クラインと似ている。

ラカンは「序」において、精神分析の今日的課題として、①精神分析技法、または精神発達段階での対象構成における想像界または幻想の役割、②リビドーの対象関係の概念が精神病にも拡大、③対抗転移とそれに相関した精神分析家の養成の重要性、を挙げる。これら3つの問題には分析家に話すという基盤を放棄するようという誘惑があると指摘する。

1) 主体の精神分析の実現における、充ちた話と空ろな話

精神分析の媒体は患者の話 (parole) であり、話は応答を呼ぶ。主体が言わないでいることを、主体のふるまいの中に見つけようとして、ふるまいの分析に及ぶ。しかし話してもらわないとどうにもならないので、再び話が始まり、沈黙は無効にされる。精神分析の場で、欲求不満はどこからくるのか。分析家の沈黙であろうか。いや沈黙よりも答の方がはるかに欲求不満をもたらす。空ろな話への答はなおさらである。問題は、主体の語らいそのものの中に内在する欲求不満ではないだろうか。精神分析の理論家たちは、自我 (ego) を欲求不満に耐える受容力として定義するようになったが、自我はそもそも本質的に欲求不満そのものである。自我が主体の欲望の欲求不満だというのではなく、自我は対象の欲求不満なのであって、その対象の中に主体の欲望が疎外されている。主体の自我 (moi) に関して何かが現れていても、それが主体によって、私 (je) の形のもとに、一人称の形にとりまとめられない限り、そこからは何も読み取ってはならない。分析家の技芸は、主体の諸々の確信を、その最後の蜃気楼が消尽されるまで宙づりにしておくことである。主体の語らいにその意味を与えるのは、時宜を得た句読法 (句切り) である。現在の技法論は、セッションの終わりは単純に時計の時間によって、語らいの織り糸とは無関係に告げられる。実はセッションの終わりは、結論を出す瞬間を析出させるための介入として十全な価値を持つ。そうすれば退行をうまく取り扱うことができる。退行とは、己の構造の分解が起こるたびに、自我 (ego) が幻影的な関係を立て直そうとしている具現にほかならない。ここまでは、分析家の万遍ない注意とかばんやりした注意とかいう古典的な定式が正当な道かもしれない。

次にラカンは充ちた話によって構成される関係を検討するが、ここは主体の欲望が語られる話であろう。他者 (l'autre) に向けられた話によって、主体の歴史が構成されていき、それを主体が引き受けることこそ精神分析の基盤がある。無意識は、空白で印づけられた、あるいは偽りで

占められた、私の歴史の1章であるが、それでも真理は再び見出される。真理は既に書かれている。症状は1つの言語活動 (langage) の構造を示し、主体の無意識は他者の語らいにある。

2) 精神分析の領野の構造と境界としての、象徴と言語活動

フロイトは、ある1つの欲望の表現を夢の中に探し求めねばならないとした。人間の欲望は己の意味を他者の欲望の中に見出すことは明確である。それは、欲望された対象への鍵を他者が保有しているからではなく、他者によって認知されるということこそ、人間の欲望の最初の対象であるからである。分析が転移に入るや否や、患者の夢は解釈できるものになる。症状は言語活動として構造化されており、言語活動の分析のうちに解消されることになる。

言語活動が人間の法になったのは、贈与物が記号 (シーニュ) へと高められ、シニフィアンとなって、契約をシニフィエとして打ち立てる象徴になるからである。フロイトの発見は、人間の本性の中に、象徴的領界への人間の関係が及ぼす影響という領野を見出したことであり、その影響がやってきた方向を逆に辿って、存在の内なる象徴化の最も根源的な審級にまで遡行していくことである。欠けている「何か」こそが象徴たらしめ、そこから言語活動が生まれる。言葉は既に不在から作られた現前であり、不在なものを不在として差し示す。ここでラカンが、人間の共同体を構造化しているのは言語であり、象徴的なものであるとみる。象徴機能によって、父という人物と法は同一視され、それを支えるものが「父の名 (non du père)」である。我々は一つ一つの精神分析のケースにおいて、象徴機能の無意識効果を識別することができる。分析家は象徴界の機能の実践家たるべきであって、この象徴界の機能こそが諸科学の新しい次元を切り開いて人間学を問直す運動の中に分析家を位置づける。ラカンは精神分析に必要な学問分野に修辞学と弁証法をつけ加える。

3) 精神分析技法における、解釈の共鳴と主体の時間

フロイトの話の効果を再発見するために、その話を動かしている諸原理をみると、ヘーゲルの自己意識の弁証法と別のものではない。フロイトの発見は、弁証法による論証過程では、自己意識から主体を脱中心化してしまうという形で主体に及ぶということであり、「意識化」のどのような探求もはかないものにするということである。普遍的なるものは個別的な契機との結びつきがあってはじめて体をなす。我々は主体から話を引き出すためには、彼の欲望の言語活動へと、すなわち欲望を牛耳っている「第一の言語活動」というべきものの中へと導き入れる。この中で彼は症状の象徴において、話をしている。精神分析が解釈している象徴は、身体、親族関係、誕生、生、死に関係するが、それが主体において効果を及ぼすためには、聞く耳を持ってもらえるだけで充分である。この話の持つ機能は、話し手の再認とか聞き手の承認と呼ばれている。

ここで言語活動における相互伝達の構造に立ち戻り、言語活動を記号とする誤解を霧散させなければならない。話の象徴化機能において、話を向けられた主体と話を発する主体との間に話が設立する紐帯によって、言い換えればシニフィアンの効果の導入によって、話を向けられた主体を変形せずにはおかない。話と言語活動の関係には二律背反が認められ、言語活動が機能的になればなるほど、話には適さなくなり、個別的なものになれば言語活動は機能を失う。話としての価値は、その言語活動が引き受けている「我々」と呼ばれる間主体性によって測られる。

ラカンは「フロイトへの回帰」という言い方によって、自分の立場を描写する。分析の中でどのように主体に答えるのがよいかを知るために、主体の自我がどの場所にあるのかを認識すること、言い換えれば、誰によって誰のために主体が己の問いをたてているのかを知ることである。患者の自我は第三者のうちであって、この第三者を媒体として主体は享樂し、その対象の中に主

体の問いが具体化している。フロイト（1937）は『有限の分析と無際限の分析』で分析の終わりをどうするのかを論じた。ラカンは象徴界と現実界との間に接合部があるという。それは1つに分析家が積極的に答えることの拒否にあり、もう1つは時間の機能に契機がある。その人を了解するための時間をあらかじめ見通すことはできない。語らいの弁証法に句読点を打つのは分析家であり、ここで分析家は、語らいの値の判定者として把握される。句切れがなければ両義性の源になり、句切れをつくれれば意味が定まる。短時間セッションは弁証的意味を持つのだという。

4. 精神分析の四基本概念（1964）

これはラカンが国際精神分析協会（IPA）から「破門」された後、1964年に高等師範学校で行われたゼミナールである。ゼミナールは精神分析家の養成を目的としており、「精神分析を実践として基礎づけているものは何か」を取り上げる。実践とは、人間が象徴的なものによって現実的なものを取り扱うことを可能にする活動を指す。ここではフロイトが基本概念として導入した4つの概念、すなわち「無意識」「反復」「転移」「欲動」を扱う。

1) 無意識と反復

無意識は力動的な概念だというのでは十分ではない。ラカンは「無意識はランゲージュとして構造化されている」と定式化する。シニフィアンが諸々の人間関係を創始的な仕方では組織化し、それらの諸関係に構造を与え、形を与える。無意識は我々に裂け目を示しており、その裂け目を經由して神経症はある現実のものとして繋ぎ合わされている。フロイトはその裂け目の中に「実現されていないもの」「掘り出しもの」を見出した。フロイトはそれを欲望と同じものとした。ラカンは原因という領域（この裂け目が生じる場所）にシニフィアンの法を導入できるという。無意識の次元には主体の水準で起きていることとあらゆる点で等しいものがあるとみる。

無意識は存在するものでもなく、存在しないものでもなく、実現されないものに属している。フロイトとデカルトの間に、主体に基づいた確信という最初の歩みには非対称性はない。非対称なのは、無意識の領野こそ主体の本拠地であるという点である。主体の相関者はもはや騙す〈他者〉ではなく、騙される〈他者〉である。フロイトは「人間の欲望は〈他者〉の欲望である」という構造的な特徴を知らなかったため、ヒステリー者の欲望とは父の欲望を担うこと、ドラの場合も代理人を介して父の欲望を担うことであつたとみられなかった（Freud, 1905）。

次に、反復は想起と関係して導入された（Freud, 1914）。反復は明快ではない形で行為（アクト）へと現れる。反復は外傷神経症と呼ばれる水準に現れ、転移とは区別すべきものである。外傷は繰り返し現れ、しかもほとんどの場合裸のまま現れる。夢はただ単に願望を埋める幻想ではない。言うなれば出会い損なわれた現実、いつになっても到達されることなく繰り返されるだけの現実が夢の中で起きる。フロイト（1920）の孫が「あっちこっち fort-da」遊びを繰り返すとき、子どもは母親が彼を置き去りにしたその点、彼のそばを離れたその点にこそ注意を注いでいる。母の不在によって生じた裂け目はしっかりと開いたままで、それがこの糸巻き投げという飛び越え遊びでもするしかないというのが主体の答えだった。この糸巻きこそ主体というべきで、この対象は小文字の a である。この反復は主体における分裂（Spaltung）の原因としての母の立ち去りの反復である。この遊びそのものが表象代理である。

ラカンの精神分析は主体をシニフィアンに従属させることで、この主体の概念を新しい仕方では据えた。主体が自らの分裂から得る利益は、現実的なものから引き起こされる原始的な分離や自己切断から現れ出る特権的な対象と結びついているということであり、この対象を小文字の対象 a (l'objet-petit-a) という。対象 a は主体が自らを構成するために手放した器官としての何もの

かであり、欠如の象徴、ファルスの象徴という価値がある。

2) 転移と欲動

転移とは一般的には1つの情動と考えられ、陽性転移とか陰性転移とか呼ばれる。陽性転移は愛であり、陰性転移は両価性と考えられている。ラカンは、「転移とは無意識の現実の現勢化(効力を持つようになること)である」という。無意識の現実とは性的現実であり、フロイトはあらゆる機会を捉えて、このことを述べてきた。人間が性的体験に沿って考えていた領域は、科学の侵入によって縮減されてきた。ユングの思想はこの領域を再建させようとするもので、主体の精神と現実との関係を元型という名のもとに具現化したのが、「リビドー」という用語を排斥することになった。フロイトにとって、リビドーとは欲望の現前、効力を及ぼすものとして現前そのものである。無意識の拍動が性的現実へと結びつく結節点が欲望である。欲望は、主体におけるシニフィアンの効果の最終的な残滓であり、「我欲す」こそフロイトの「我思う」である。フロイトはつねにリビドーを一次過程の本質として主張しており、転移において性的現実の重みが明確に姿を現してくる。ラカンは、ここで問題になっているのは分析家の欲望であると述べ、ブロイアーの患者アンナ・Oの偽妊娠を例にあげる (Freud, 1893-95)。「人間の欲望は〈他者〉の欲望である」という定義に従えば、この患者の妊娠はブロイアーの欲望の現れで、転移理論は分析家の欲望であるという。

次に、「欲動 Trieb」という基本概念は新しいもので、衝迫 (Drang)、源泉 (Quelle)、対象 (Object)、目標 (Ziel) の4つの要素に区別できる (Freud, 1915)。衝迫は恒常的な力であり、昇華は欲動の満足であり、対象は本来いかなる重要性もなく無差異であり、性源域は縁という構造によって特徴づけられている。性は転移という形で働いているが、ある瞬間において性が愛という形で公然と現れる。性が部分欲動という形でしか機能することができないのは、内的緊張の一定のホメオスタシスを維持するシステムのためである。フロイトは一方に部分欲動を置き、もう一方に愛を置き、この二つは同じものではないという。性器期的欲動が形成されるのは、〈他者〉の領野であり、愛とは本質的に自我全体の性的熱情にほかならない。部分欲動は対象 a を回った後、循環運動を介して、主体は大文字の他者 (Autre) の次元へと到達する。「他者を通して自らを愛すること」は、対象のナルシシズム的な領野のものである。リビドーは、不死の生、押さえ込むことができない生、いかなる器官も必要としない生、壊すこともできない生、そういう生の本能である。対象 a はこれらの代理、これに姿を与えるものにすぎないが、リビドーは主体を大文字の他者の中に位置づける機能を持つ。すべての欲動は本質的に死のゾーンとの親和性を示し、無意識における性を現前化すると同時に、その本質において死を表すという2つの面を調停するという。

同一化、理想化、投影、取り込みなどは普通に使われる用語である。取り込みと投影は、一方が象徴的なものが支配している領野に関係し、他方が想像的なものが支配して領野に関係し、両者はある1つの次元で出会うことはない。フロイト (1921) は『集団心理学と自我分析』で同一化と理想化について扱っている。転移が無意識の現勢化なのだとしたら、転移は無意識の清算でもありうるのか。精神分析を終えた後には、無意識がなくなるのか。ラカンは、分析が転移の中にある欺瞞の面に呼び出されて、何か逆説のようなものとの出会いが起こる方向で収束するという。分析家は対象 a と呼ぶ、あの特異な、逆説的な部分対象を再発見することになる。対象 a の問題は、この後、「ボロメオの結び目」からみた対象になる (Lacan, 1975)。

IV. 考察

フランスの思想には17世紀のデカルトのコギト（自己意識）由来の伝統があり、ラカンはフロイトの精神分析学説に、主体としての〈わたし〉がどう扱われているのかに多大な関心があった。さらに、ラカンの野心は無意識を定義できなかった哲学者の代わりになろうとしたのではない。ラカンの精神分析の実践は、フロイトの理論を哲学的に読み直すことであった。ラカンは、フロイト（1923）のいう、心的装置はエス、自我、超自我の3つの審級からなるという「第二局所論」に注目する。ラカンは、フロイト（1933）の『続・精神分析入門講義』にある‘Wo es war, soll Ich werden’について、「かつてエスであったところを自我にしなければならない」ではなく、「それがあったところに、わたしは生起しなければならない」として、Ichを想像上の自我と主体である〈わたし〉に再分割する立場を取った。

アンナ・フロイトの流れをくむアメリカの精神分析は、Ichを自我と同一視した自我心理学が主流で、ラカンはこれを適応精神分析だとして批判する。自我心理学から距離を取った理論をみると、ウィニコットは自我の中に「本当の自己」と「偽りの自己」をみる（中野，2019）。「本当の自己」はほどよい母親によって幼児の万能感が満たされて成立するが、環境に服従することに基づいて「偽りの自己」がつくられる。「偽りの自己」は「本当の自己」を防護し保護するが、「偽りの自己」が欠陥をみせても、「本当の自己」は隠蔽されたままであるので、人格の核にある「本当の自己」が実現できる条件を探し出すことが健康へ向かう道だとした。ちなみに土居（1999）は、偽りの自分を作るきっかけとなるコンプライアンス（相手に合わせること）が挫折した隠れた甘えによる、として説明する。ユングの場合、自我と自己（self）は最初融合しているが分化し、意識は自我を中心にしてある程度の安定性と統合性を持つ。自己は意識と無意識とを含んだ心の全体性の中心であり、心にある対立的な要素や思考・感情を統合すると考えられた。ユングは自己を元型として、分析心理学で自己実現できることを示した。

ラカンは、自己はいかにして自己が在るのを知るのかという起源について、鏡像段階から考察した。幼児は直接見ることができない身体を鏡の中でみる。他者が鏡の役割をする。自我は、まなざしによって外部から受容されるものであり、客観的な認識の主体ではなく、ナルシシズム的リビドーの対象であるとし、ラカンは自我と主体を分離した。さらにラカンはコジェーヴからヘーゲル哲学を学び、デカルトの「われ思う」はヘーゲルでは「われ欲す」になることを知る。他方で、ラカンはクラインの対象関係論に関心を持ち、大文字の他者と小文字の他者、それに欲望の対象aという概念を導入する。主体の欲望が他者との関係で弁証法的に展開される結果、ラカンは「人間の欲望は〈他者〉の欲望である」という構造的特徴を認識した。

1953年から、レヴィ＝ストロースに刺激されて、ラカンは第三の局所論ともいうべき「象徴界、想像界、現実界」や、F. ソシュールの言語論を取り入れて、構造主義的に展開する。フロイトの局所論の文脈で、自我には〈想像界 Imaginaire〉、超自我には〈象徴界 Symbolique〉、エスには〈現実界 Réel〉が対応する（Clément, 1981）。〈想像界〉は鏡像段階で出会うもので、寸断された自己像を想像的に先取りされて構築されたものが自我である。ここでは自分よりも優れた他者への同一化によって形成される「理想自我」が自我の母胎になる。〈想像界〉は主体を安全なところに置く保護服、鎧のようなものであり、これが消失するときは、幻覚や主体の行動化が現れる。〈象徴界〉はすべてを管理し、主体に先だって存在している。象徴的なものはシニフィアンの連鎖の中にある。「自我理想」は主体がそうありたいとする象徴的次元にあり、自我の中へ取り入れられると、象徴機能は想像界を決定する。象徴機能は「父の名」にも結ばれている。無

意識は言語のように構造化され、象徴界の次元にある、という。主体が意識的に話を再現しようとしても主体の手から逃れていく。ラカンは分析の過程は象徴を補完する作業だという。〈現実界〉はエスと同じように、制御しがたく不可能なものと規定されている。主体にとって欲望の対象とは本性上失われた対象であり、再発見されなければならないものである。無意識の形成物（症状、夢、失錯行為、機知）から、実現化されていないものを知ることができる。

このようにラカンは哲学的な弁証法で独自の精神分析の世界を切り開いた。しかし、彼の「短時間セッション」は評価されず、IPAから「破門」された。精神分析家の資格について、ラカンは「精神分析家は、自己自身によってのみ、権威づけられる」という（新宮、1995）。パリ・フロイト学派には客観的な資格の基準があるわけではなく、学派は分裂した。人間の欲望を扱うのは厄介なものであり、それを支配する言語の持つ象徴機能に焦点を当てたところがラカンの功績であるように思われる。

V. おわりに

ラカンの精神分析的実践として、もう1つ特筆すべきことは、ゼミナールによって、精神分析家を養成したことである。フロイトは書く人であったが、ラカンは話す人であり、ひどく難解な文章を書く人である。ラカンの新しい発想は、話し手と聞き手との間で相互承認する中で、生まれたものであろう。話は書くことの数倍の量に達するので、彼のゼミナールをすべて目に通すことは困難である。ここで、書くことが苦手で、チェスナット・ロッジで246回の講義をした、アメリカの精神分析家 H. S. サリヴァン（1892-1949）が思い出される（中野、2011）。彼は話すことで「対人関係論」を定式化できた。彼の死後、録音された講義録はテーマ別に編集され、我われは興味深く読むことができる。他方、ラカンのゼミナールは、『エクリ』以後、ほとんど編集されることもなく公刊されている。それらはまるで哲学のためのテキストようである。

文献

- 1) Clément, C. (1981). *Vies et Légendes de Jacques Lacan*. Éditions Grasset & Fasquelle. 市村卓彦・佐々木孝次（訳）（1983）. ジャック・ラカンの生涯と伝説. 青土社.
- 2) 土居健郎（1999）. 「甘え」概念についての若干の考察. 北山修（編集代表）. 「甘え」について考える. 星和書店, pp213-217.
- 3) Freud, S. (1893-95). *Studies on Hysteria*. S.E., Vol. 2. 芝伸太郎（訳）（2008）. ヒステリー研究. フロイト全集2. 岩波書店.
- 4) Freud, S. (1894). *The Neuro-Psychoses of Defence*. S.E., Vol. 3, pp41-61. 渡邊俊之（訳）（2009）. 防衛—神経精神病. フロイト全集1. 岩波書店, pp393-411.
- 5) Freud, S. (1905). *Fragment of an Analysis of a Case of Hysteria*. S.E., Vol. 7, pp1-122. 渡邊俊之他（訳）（2009）. あるヒステリー分析の断片. フロイト全集6. 岩波書店, pp1-161.
- 6) Freud, S. (1914). *Remembering, Repeating and Work-Through*. S.E., Vol. 12, pp145-156. 道旗泰三（訳）（2010）. 想起, 反復, 反拗処理. フロイト全集13. 岩波書店, pp295-308.
- 7) Freud, S. (1915). *Instincts and their Vicissitudes*. S.E., Vol. 14, pp111-140. 新宮一成（訳）（2010）. 欲動と欲動運命. フロイト全集14. 岩波書店, pp167-193.
- 8) Freud, S. (1920). *Beyond the Pleasure Principle*. S.E., Vol. 18, pp1-64. 須藤訓任（訳）（2006）. 快原理の彼岸. フロイト全集17. 人文書院, pp53-126.
- 9) Freud, S. (1923). *The Ego and the Id*. S.E., Vol. 19, pp1-66. 道旗泰三（訳）（2007）. 自我とエス. フロイト全集18. 岩波書店, pp1-62.

- 10) Julien, P. (1990). *Le retour à Freud de Jacques Lacan*. Les Editions EPEL, Paris. 向井雅明(訳) (2002). ラカン、フロイトへの回帰—ラカン入門. 誠信書房.
- 11) Lacan, J. (1932). *Da la psychose paranoïaque dans ses rapports avec la personnalité*. Le François, Paris. 宮本忠雄・関忠盛(訳) (1987). 人格との関係からみたパラノイア精神病. 朝日出版.
- 12) Lacan, J. 宮本忠雄・関忠盛(訳) (2011). 二人であることの病い. 講談社学術文庫
- 13) Lacan, J. (1938). La famille: le complexe, facteur concret de la psychologie familiale. Les complexes familiaux en pathologie. *Encyclopédie Française*. Paris Larousse. 宮本忠雄・関忠盛(訳) (1986). 家族複合. 哲学書房.
- 14) Lacan, J. (1953, 1966). *Fonction et champ de la parole et du langage en psychanalyse*, in *Écrits*. Edition du Seuil. 新宮一成(訳) (2015). 精神分析における話と言語活動の機能と領野. 弘文堂.
- 15) Lacan, J. (1964). *Le Séminaire, Livre XI: Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*. Texte établi par Jacques-Alain Miller, Seuil 1973. 小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭(訳) (2020). 精神分析の四基本概念 (J-A ミレール編) 上・下. 岩波文庫.
- 16) Lacan, J. (1966). *Écrits*. Editions du Seuil. 宮本忠雄他(訳) (1972). エクリ I. 佐々木孝次他(訳) (1977). エクリ II. 佐々木孝次他(訳) (1981). エクリ III. 弘文堂.
- 17) Lacan, J. (1974). *"TÉLÉVISION"*. Éditions du Seuil. 藤田博史・片山文保(訳) (2016). テレビジョン. 講談社学術文庫.
- 18) Lacan, J. (1975). *"LE SÉMINAIRE, Livre XX. Encore (1972-1973)"*. Éditions du Seuil. 藤田博史・片山文保(訳) (2019). アンコール. 講談社選書メチエ.
- 19) Levi-Strauss, C. (1967). *Les Structures Élémentaires de la Parenté*. Mouton & Co. 福井和美(訳) (2000). 親族の基本構造. 青弓社.
- 20) 中野明德 (2011). H.S. サリヴァンの生涯と対人関係論. 福島大学総合教育研究センター紀要, 11, 27-36.
- 21) 中野明德 (2019). D・W・ウィニコットの情緒発達理論と精神分析. 別府大学大学院紀要, 21, 41-61.
- 22) 中野明德 (2021). アンナ・フロイトの児童分析と自我心理学—父フロイトから受け継いだもの. 別府大学大学院紀要, 23, 17-36.
- 23) 中野明德 (2022). なぜフロイトとユングは訣別したのか—二人の往復書簡の分析. 別府大学大学院紀要, 24, 77-91.
- 24) 中野明德 (2023). ビエール・ジャネの「心理分析」—フロイトの精神分析とどこが違うのか. 別府大学大学院紀要, 25, 1-15.
- 25) Ricoeur, P. (1965). *De l'interprétation, essai sur Freud*. Editions du Seuil. 久米博(訳) (1982). フロイトを読む—解釈学試論. 新曜社.
- 26) Roudinesco, E. (1993). *Jacques Lacan, Esquisse d'une vie, histoire d'un système de pensée*. Fayard. 藤野邦夫(訳) (2001). ジャック・ラカン伝. 河出書房新社.
- 27) Saussure, F. (1916). *Cours de linguistique générale*. 町田健(訳) (2016). 新訳ソシュール一般言語学講義.
- 28) 新宮一成 (1995). ラカンの精神分析. 講談社現代新書.